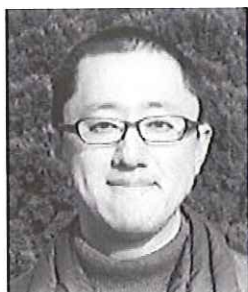


都井岬で野生馬観察ガイドツアー！ ～持続可能な自然観光地を目指して～



串間市商工観光スポーツランド推進課

文化財専門員 ^{あき}秋 ^た田 ^{まさる}優

昭和53年生まれ。静岡県出身。野生馬に憧れて宮崎へ移住。
宮崎大学大学院農学研究科卒。平成20年から現職。

1 野生馬との出会い

宮崎県に野生化した馬がいる、そんな話を聞いて、都井岬へ行ったのは二十歳頃でした。最初の出会いは梅雨の時期で、都井岬は濃霧に包まれて真っ白でした。残念にも思いましたが、とにかく芝生の草原に登ってみると、霧の中から一頭の黒い雄馬が浮かび上がったのです。

彼は草を食べていましたが、こちらに気づいた様子で顔を上げました。牧場の馬しか知らない私は、人間を見つければ馬は寄って来るものと思っていました。

しかし彼の反応は、「なんだ、人間か」という感じで、再び草を食みつつ白い霧の中へ溶け込んでいったのです。



霧の岬馬

私の中で、馬という動物の固定観念が壊れた瞬間でした。人間の手を離れて、自分たちの世界をもった野生馬がいる。この時の情景は神々しいほどで、いまでも脳裏に焼き付いています。

2 都井岬の野生馬

都井岬の馬は「岬馬」とよばれ、現代では希少な日本在来馬です。一般的には野生馬と呼ばれますが、元は家畜だった再野生化馬です。いまから約300年前の江戸時代に、武士の馬を生産する牧場として拓かれたのが都井岬であり、その頃から続く日本の馬として残っているのが岬馬なのです。

現代では、時代劇にも足の長い大きな馬が出てきますが、これは外国産の馬を使っている訳で、実際には岬馬のような大きさの馬に、江戸時代の武士が乗っていたとイメージする事ができるのです。

現在の日本には、岬馬を含めて8種の在来馬が全国各地に生き残っていますが（北海道和種馬、木曾馬、岬馬、野間馬、対州馬、トカラ馬、宮古馬、与那国馬）、

人の手を離れて野生化して暮らしているのは岬馬だけです。



岬馬の体型

また、これらの日本在来馬を比べると、北海道和種（道産子）や木曾馬は体型が太くてズングリしていますが、岬馬では足が細くてスマートであるという特徴がみられます。これは、馬の利用方法が、昔は武士の乗馬用だったものが、近代は農耕馬の使い方が主となり、馬の体型が荷駄型に変わったのだと考えられます。その一方で、野生化して使役されることなく残った岬馬は、当時の武士が本当に乗っていた乗馬型の体型が残されたのだと考えられているのです。

以上のことから、岬馬は「自然環境における特有の動物又は動物群集」として、唯一、国指定文化財の馬となりました。

3 野生馬の社会

野生馬は、一夫多妻性のハーレム群を形成して暮らしています。家長の雄馬に複数の奥さんと、その子供たちから構成される家族群です。春の繁殖シーズンは、毎年10～15頭の子馬が誕生します。

春に出産するのは、気候が温暖であり、

エサとなる青草が豊富に生産され始める季節だからです。もし出産が遅れると、子馬が梅雨の長雨や夏の暑熱にさらされ衰弱する可能性もあるため、春に出産することは母馬にとって大事な作戦です。



母子

馬は約11ヶ月の妊娠期間があります。前述のとおり、春に出産をするためには、交尾も春に行う必要があります。ゆえに、春は出産の時期であると同時に、雄馬にとっては、結婚相手をめぐって戦う恋の季節でもあるのです。

野生馬の闘争行動は、その戦いの流れが儀式のように決まっています。観察すると大変面白いです。まず2頭の雄同士が鼻を突き合わせて、鼻息でコミュニケーションをします。次に、噛みついたり蹴



雄の戦い

ったりと、激しい戦いが繰り広げられ、最後はなんと、相手に向かってお互いが尻を向け、馬フンをして終了するのです。ケンカが終わると、その場所には両者の馬フンの山が残されます。

岬馬は、馬フンの臭いで家族の違いを識別しています。ケンカのあとに両者が馬フンをするのは、自分の臭いを残して領有権を主張するための行動なのです。都井岬へ行くと、たくさんの馬フンが山になっている所をご覧になった方もあるかとおもいます。これは、野生馬の雄が臭いを残すために行ったものなのです。

一夫多妻で生活する岬馬の群れには、複数のお嫁さんが居ます。ときには同じ群れの奥さん同士でケンカをすることもありますが、彼女たちを観察していると、どうやら馬の社会にも順位性があるようです。雌の闘争行動について調査すると、雌社会では年齢とケンカの強さに相関があるようで、年上のオバサンほど強いという傾向が確認されました。

ハーレム群を観察していると、群れの移動が始まる際には、まず年齢の高い雌馬が起点となって動き出す傾向にあります。年上の雌が動き、若い奥さん達がそれに従って雌の集団であるハーレム群が動き始めます。そこで雄馬はどうかといえば、最後尾から雌の群れに追従し、家族の移動に遅れた馬たちを追いたてて移動を促す役割をしています。奥さんが群れの舵取りをし、お父さんがモーターの役割をしている訳です。

都井岬のような場所では、いまどこへ行けばエサがあるのか、どの道を行けば

安全に水場へ行けるのか、環境への知識が重要となります。年上の雌馬が群れで一目置かれているのは、そうした知識や経験が関係しているのかもしれませんが。



ハーレム群

都井岬の野生馬は、宮崎大学農学部が古くから調査を行ってきました。岬馬はすべて個体識別されており、1頭ごとに名簿が作られ、大切にされてきました。馬たちの家系図も作られ、そのデータは半世紀分も連続記録として続いています。その貴重な研究の蓄積によって、前述のように興味深い野生馬の社会が明らかになってきたのです。

まるでサファリパークのように、迫力ある野生馬の社会を、気軽に観察できる。これが都井岬の一番の魅力だと思います。

4 都井岬の自然

野生馬ばかりが注目されがちですが、馬を中心とする都井岬の動植物も面白い役者がそろっています。

都井岬は禁猟区であり、岬馬とともにイノシシやアナグマ、ノウサギ、イタチ、ニホンザルなど、多くの野生動物が共存しています。3月になると、緑の草原に

絶滅危惧種のオキナグサも顔を出します。都井岬は、岬馬だけではなく、その生息環境も『岬馬およびその繁殖地』として文化財指定され、保護されてきました。ゆえに、この土地に生息する希少な絶滅危惧種も、馬と共に残されてきたのです。



オキナグサ

ここで見られる絶滅危惧種の植物には、いくつか特徴があります。まず1つには岬馬が食べない植物であること。前述のオキナグサも、キンボウゲ科の毒草で、馬が食べないから残されています。次に、都井岬のように、よく開けた日当たりの良い草原を好む植物であることです。

岬馬は1日に約40kgの草を食べます。都井岬全体で考えると毎日3~4tの草が消えている計算です。逆に考えれば、これを養えるだけの膨大な草が毎日生産されているということで、岬馬の芝刈り効果は素晴らしいものです。もしも仮に、岬馬が絶滅した場合には、この都井岬の美しい草原は、わずか数年で深いヤブに覆われてしまうでしょう。オキナグサのように草原を好む植物は、ヤブに覆われると光が当たらなくなり、生育できなくなります。オキナグサは、馬が管理する

草原で、馬と共に生き残ってきたのです。

岬馬は、大量の草を食べているので、出す量も大変なものです。1頭の馬が、1日に約20kgのフンを排出しています。全体で考えれば、毎日1.5~2tという、膨大なフンが生産されている訳です。



センチコガネ

都井岬の馬フンを観察すると、数種の昆虫を見つけることができます。写真はセンチコガネという昆虫で、『雪隠小金虫』が名前の由来となっています。雪隠（せっちん）は昔の言葉でトイレのことです。この昆虫は、動物のフンを食べて分解してくれます。この他にも、フンを好んで発生する『糞生菌』というキノコがあり、こうした菌類も自然界の貴重な分解者です。

また、都井岬の馬フンを観察すると、植物の芽生えが見られます。馬は植物を一方向的に傷つけて食べるだけではなく、種子を飲み込んで運びます。別の場所でフンをすれば、これは肥料付きの種子を散布するのと同じです。岬馬は餌となる緑を広げる役割もしている訳です。

こうして都井岬は、人工的な草地改良もされずに、300年以上も循環型のエコ

システムとして続いてきたのです。岬馬を中心とする動植物の営みは、まさしく生態系の縮図そのものです。



キノコと芽吹き

5 岬馬を守る人々

都井岬の美しい景観を保全するには、岬馬の存在が重要です。しかし厳密には岬馬だけでも、この風景を維持する事は不可能です。なぜなら、岬馬が食べない毒草などの植物は残ってしまうからです。

本来が森の国である日本では、植物の生育が旺盛であり、野焼きや草刈りなど里山的な管理がなければ草原は維持されません。日本の草原は、私たちの祖先が森を開拓し、その生活の歴史と共に守られてきた景観なのです。

都井岬も例外ではなく、馬を保護している都井御崎牧組合の活動により、夏は草刈り、冬には野焼きが行われています。

もしもこの活動がなければ、馬の食べない植物がはびこり、草原は深いヤブに覆われて、前述のオキナグサも消えてしまうでしょう。都井岬の自然は、岬馬と、これを守る人々の共同作業によって保護されてきたのです。

私たちは自然保護を考える時、人間の



野焼き風景

自然に対する影響はすべて悪である、と考えがちです。しかし現実には、人間がまったく手を付けずに守られる自然と、前述のように人々の生活の歴史によって守られる自然があるのです。

6 保全と活用の両立

都井岬のような『自然観光地』では、環境の保護と活用を両立させるという難しい課題があります。前述のとおり、都井岬は『人間が入らなければ守られる自然』ではありません。岬馬と、これを守る人々の両方が必要です。ですから、持続可能な都井岬を考えた場合は、単に補助金を投入するだけではなく、岬馬がこれを守る人々にとっても良い収入源になることが必要です。

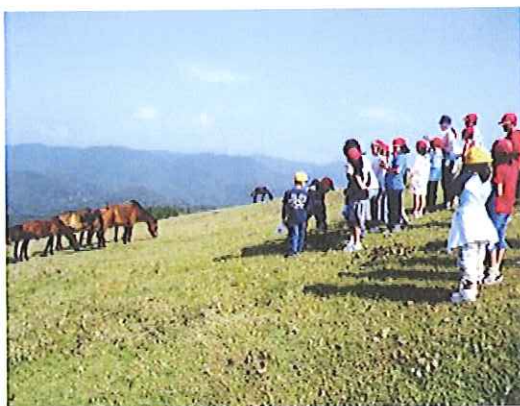
その一方で、あまり観光振興ばかりが先行しすぎると、今度は土地の乱開発や維持費の増加、希少植物の盗掘、ゴミの不法投棄などにより、持続不可能になりかねません。都井岬のような場所には、国立公園におけるレンジャーのように、現場の調査研究、監視活動、ガイド等の啓発活動を行うスタッフが必要でしょう。

海外のエコツアー先進地では、専門に研究をしている大学生がツアーガイドを務めるという事例もあります。大学生は最新の研究成果から解説を行い、ツアー収入によって現場での研究を継続でき、なおかつ、それは価値を啓発する活動でもあり、さらには観光客を引率する事で環境保護の監視員としても機能します。

現場の研究を行いながら、観光客には質の高いガイドを提供し、そのサービスの正当な対価として観光客からはお金を頂き、それがまた現場の環境を守る活動につながる。都井岬の持続可能な保護と活用を考えた場合には、このシステムが理想的であると考えます。

7 参加体験型の観光地を目指す

岬馬の社会や、貴重な動植物の存在を知るとなると、車で通過するだけの観光客を見ていて、こんなに面白いのに野生馬を見ないで帰るのはもったいない、という想いが強くなりました。そして、小学校での授業や観光ガイド等を始めたのが今から10年ほど前のことです。



小学校の授業風景

近年の観光は『眺める観光』から『参

加体験型の観光』へとニーズが変化していますが、都井岬は『ただ馬が居だけの風景』という素材のままの状態です。野生馬を中心とする動植物の面白さは、素材のままでは魅力を十分に伝える事が難しい為、お客様は楽しみ方がわからずに通過しています。そこにガイドが育成されれば、お客様に都井岬の楽しみ方をご提案できるのではないかと期待をしているのです。



ガイド風景

都井岬ガイドは、お客様を岬馬の近くまで安全にご案内して、野生馬の社会や動植物の解説をします。岬馬との正しい接し方や、自然の楽しみ方をレクチャーする事で、啓発活動にもつながります。観光客を引率する事でゴミのポイ捨てを防いだり、希少植物を盗掘から守ったりする監視員としても機能するでしょう。また、これを有料ガイドにすることで、野生馬の保護活動に携わる地域の人々がこれを収入の一部にできれば、保護活動を継続するための一助となるはずです。有料にすると、料金に見合うだけの質の高いガイドを提供する、という責任感やプロ意識も培われます。

野生馬、希少植物、フン虫の存在など、都井岬の環境すべてを『箱物でない自然博物館の展示物』とすれば、これは莫大な開発投資を必要としない魅力的な資源だと考えられます。そしてガイドという手法であれば、ガイドをするスタッフの勉強だけで実行可能です。

現在、ガイド人の育成講座を開講し、常時受入れ可能なガイド体制を目指して準備が進められていますので、都井岬へお越しの際にはぜひ御利用下さい。

春は子馬が生まれ、ボス馬のケンカが始まり、オキナグサの花も咲き始めて、都井岬が一番良い季節を迎えます。

【お問合せ】

串間市商工観光スポーツランド推進課

電話：0987-72-1111



春の風景



子馬の寝顔